

曲目解説

Ton-poem "Finlandia", op.26

Johan(Jean) Julius Christian Sibelius (ジャン・シベリウス) 作曲

交響詩「フィンランディア」作品 26

中野 智仁 編曲



北欧を代表する作曲家シベリウス(1865-1957)の作品は、交響曲、交響詩、劇音楽、歌曲、ピアノ曲等多岐に及び、作風には、母国フィンランドの澄んだ空気や大自然、そして民族的な情感が色濃く反映されている。19世紀末、当時のロシア皇帝ニコライ2世によりフィンランドは自治権を取り上げられ、民衆はロシア軍の圧力に日々苦しんでいた。その中で祖国を愛する人々によりフィンランドの歴史を描いた演劇「いにしえからの歩み」上演の話が持ち上がり、この劇の付随音楽が、シベリウスに委嘱され、1899年に全6曲の付随音楽がヘルシンキで初演され、

感動を呼ぶ終曲が特に好評となり、聴衆は祖国への熱き想いを新たに。終曲は「スオミ」(フィンランドの意味)と名付けられ、1900年のパリ万国博覧会で交響詩として初演。しかしロシア皇帝の耳に入り即刻演奏禁止。この弾圧に対して曲名を変え上演。その間にフィンランドの独立運動は一層盛り上がった。その後この曲の中間部にある美しい旋律にはいつの間にか歌詞が付き、「フィンランディア(フィンランド賛歌)」として歌われ続け、それによりフィンランド独立運動自体も肯定され、ロシア革命が起こった1917年に、フィンランドは独立を宣言した。曲は冒頭の「苦難のテーマ」でフィンランド人の苦悩を描き、その後ファンファーレ的な「闘争の呼びかけのテーマ」が出て、愛国心を呼び起こす。しばらくは冒頭のテーマとこのテーマが交錯し、やがてもうひとつの「闘争の呼びかけのテーマ」が表れ、曲は一転、勝利へ向かう戦いの音楽になる。やがて曲が収まると、賛歌風の旋律が表れフィンランドの勝利を歌い上げ(ここの部分がフィンランディア賛歌)前半の闘争のテーマと組み合わせられて感動的な終曲をむかえる。本曲は、慶応義塾マンドリンクラブ第175回定期演奏会(2005年12月24日 文京シビックホール)にて演奏され好評を得た。今春、編曲者の中野智仁氏により、当アンサンブルの為にマンドリン弦楽合奏版に編曲。今回の演奏にあたり快く編曲と演奏の許可を頂きました事、心よりお礼申し上げます。

Reveie de Poete

Giuseppe Manente (ジュゼッペ・マネンテ) 作曲

「詩人の瞑想」



Giuseppe Manente

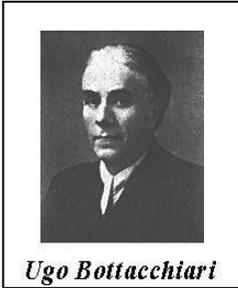
作者は1862年イタリアのサンニオのモルコーネに生まれ、1941年ローマで没した作曲家である。王立陸軍学校付属の軍楽学校に入り、1903年、歩兵第三連隊軍楽隊長になり、幻想曲「降誕祭の夜」、序曲「国境なし」、幻想曲「華燭の祭典」、「マンドリン芸術」、「メリアの平原にて」等の力作を発表し賞讃を得た。本曲は作品番号を持っていないが、フランスの作曲家マチョッキが主宰していたL'Estudiantina(エスチュディアンティナ)誌の1926年11月号に載ったもので1934年L'Estudiantina誌がL'Orchestra a Plectreと誌名を改めた時期に“L'Estudiantinaの忘れた主な作品”と題して、出版目録が出されたことがあり、その中に本曲も含まれていた。マンドラとギターによる主題の演奏、それに続く全パートの主題の再現、柔らかく温かな調べと共に

に詩人の世界へ引き込んで行く。詩人は瞑想を続け、雄大とも思える高まりを見せた後、再び深く瞼を閉じる。

Incantesimo di um Sogno meditazione

Ugo Bottacchiari (ウーゴ・ボッタキアリ) 作曲

瞑想曲「夢の魅惑」



ボッタキアリは 1879 年、イタリアに生まれたオペラの作曲家である。ロッシェニ音楽学校でピエトロ・マスカーニの教えを受け管弦楽、室内楽、声楽等多くの分野で作品を残した。マンドリン曲においても「詩的セレナータ“夢！うつつ！”」、詩的幻想曲「誓い」など多くの作品を発表。その作品の中で、マンドリンオリジナル作品の最高位に位置し、斯界の至宝として愛好されているのが本曲である。作風としては、重厚壮大なロマンティシズムに満ちあふれ、分割された高音部パートによる分奏の美しさは比類のないものである。本曲は戦時

中の 1941 年イタリアのシエナで行われた、作曲コンクールで 1 位入賞した。1940 年と 41 年の二度に亘って開かれたこのコンクールは大きな成果をあげ、多くの名曲を生み出したが、敗戦により深い眠りにつく事となった。そして作者も 1944 年に逝去した。その後 1974 年渡伊した同志社大学マンドリンクラブ OB の岡村氏が、これら作品を保持するシエナのアルベルト・ポッチ氏より譲り受け 1975 年 12 月 9 日、同志社大学マンドリンクラブ第 87 回定期演奏会(京都会館第 2 ホール)で初演され、この名曲が蘇る事となった。曲はマンドローネによる重厚な主題の提示によって開始され、徐々に高音部へ展開しこの主題は様々な形を変え、三連符と八分音符が交錯する伴奏パターンを縫って美しい音の空間を創り出し、全体を貫く一つの主題が強い主張を持ったまま様々な姿を変え、時には激しく、時には幻想的に繰り返される様はまさに作者の面目躍如といったところであろう。

Symphony No.9 in e-minor Op.95 "From the New World"

交響曲第 9 番 ホ短調 作品 95「新世界より」

Antonín Leopold Dvořák (アントニン・レオポルド・ドヴォルザーク) 作曲

小穴 雄一 編曲

ドヴォルザークは、1841 年チェコの片田舎ネラホゼヴェス村に肉屋兼旅館を営む家に生まれた。父親は、ヴァイオリンやツィターをたしなむ素人音楽家であったという。おそらくドヴォルザーク自身も、幼いころから、父やその仲間の奏でるボヘミアの庶民の音楽に触れ親しんでいたであろう。16 歳でブラハのオルガン学校に進み、その後ヴィオラ奏者としてブラハの楽団に在籍し、その頃から作曲を始めていたといわれる。彼が作曲家として世に出るきっかけをつくったのは、かのブラームスであった。ブラームスから楽譜の出版社であるベルリンのジムロックを紹介され、それが後に大好評となる「スラヴ舞曲第一集」の作曲の依頼につながり、彼の名声が国際的になる糸口となったのである。チャイコフスキーと並んで、ドヴォルザークは、いわゆる「国民楽派」に分類されるが、チャイコフスキーがフランス音楽系の標題音楽志向であったのに比べ、彼がドイツ音楽系の絶対音楽を志向していたといわれるのは、ブラームスの影響が大きかったからであろう。ブラームス譲りの構成力と、生地ボヘミアの音楽に根ざした美しい旋律を生み出す才能とを兼ね備えた彼は、当代第一級の作曲家として広く認められるところとなったのである。1892 年から 95 年までの間、ドヴォルザークは、ニューヨーク・ナショナル音楽院に招かれ、その院長を勤めた。米国滞在中に彼は、アフリカン・アメリカンが歌う黒人霊歌に強く惹かれたようである。彼は「この国の音楽の未来は、黒人たちの歌を基礎に築かれるべきである。これこそアメリカにおいて発展する真摯で独創的な作曲の基礎となるべきなのだ。」と語ったといわれる。あたかも後のジャズやブルースの誕生と発展を予言したかのようである。このような黒人音楽への強い関心と、夏の休暇で訪れた村でのチェコ移

民入植者との触れ合い、つるる母国への郷愁とが結びついて、この交響曲第9番「新世界より」は生まれたのである。「新世界より」には、古くから、この曲をアメリカの音楽とみるか、チェコの音楽とみるかという論争があったといわれる。しかし、そういった単純な二分法ではこの名曲は捉えられないであろう。チェコの片田舎の生まれというドヴォルザークと、19世紀後半に大量に新大陸へ渡っていた東欧からの移民は、まさに同じ階層の人々である。海を越え遠い異国の地に移り住んだ彼らとのふれあいは、ドヴォルザークの心に、同じ母国を離れた者としての深い共感とそこはかかない望郷の念を呼び起こしたであろう。その意味で、この作品を「移民」の音楽と捉えることもできるのではなからうか。異国の地から故郷を想う、この曲が、"the New World"でなく "From the New World" たる所以である。

第一楽章 Adagio - Allegro molto 木短調

序奏付きのソナタ形式による楽章である。穏やかな序奏のあと、第一主題が颯爽と現れる。この主題は単純な音形であるがとても印象的である。こうした単純な音形を主題にするのは、ブラームス譲りの手法であろう。一方、第二主題はドヴォルザークがアメリカ滞在中に触れた黒人霊歌の主題によっているといわれている。

第二楽章 Largo 変二長調

非常に有名な楽章。形式的にはふつうの3部形式である。短い序奏のあと有名な主題が始まる。旋律作家ドヴォルザークを象徴するような美しく深みのある主題で、後で弟子によって「家路」という歌曲にまとめられたごとく、懐かしい故郷への切々たる思いがよく伝わってきそうな主題である。原曲ではイングリッシュホルンが奏でるこの有名な旋律を、なんとギターが受け持つ。意表を衝いた編曲は、小穴編曲の面目躍如といえ、今回の演奏の聴きどころのひとつであろう。

第三楽章 Scherzo, Molto vivace 木短調

スケルツォとあるが、比較的転調が少なく舞踏的な主題も多いため、スケルツォというよりは、むしろダンス音楽の雰囲気を持っている。特に3拍子の2小節を一括して扱う手法は、チェコの舞踏音楽によく見られる手法である。形式としては複合三部形式になるが、スケルツォ部、トリオ部共にさらに三部形式を構成していて、複雑な構造になっている。

第四楽章 Allegro con fuoco 木短調

序奏付きのソナタ形式。人気のある楽章であるが、第1楽章よりもむしろ保守的な構造である。短調でありながら、非常に明るい肯定的な曲である。第1楽章から第3楽章までの主題が次々と姿を見せるのも面白い。一般に交響曲の締めくくりは、力強い強奏で終わることが多いが、この曲は、音量を落としながら消えるように閉じられる。あたかも、いつまでも絶ちがたい故郷への想いを表すかのように・・・

本稿の執筆に際しては、藤本理弘氏のホームページ「クラシック音楽館」(<http://www.fsinet.or.jp/~mfujimot/music/>)を参考にさせていただきました。許諾をいただいた藤本氏に感謝の意を表します。

編曲者紹介 小穴 雄一 (おあなゆういち) 1957年東京生まれ。慶応義塾高等学校入学後マンドリンを始める。マンドリンを竹内郁子女史に師事。指揮法と楽典基礎を久保田孝氏に師事。慶応義塾大学4年次に常任指揮者の服部正氏の副指揮者を務める。卒業後は会社勤めの傍らクリスタル・マンドリン・アンサンブルの客演指揮、アンサンブル・アメデオの指揮者兼編曲者として精力的に活動中。交響曲第9番「新世界より」は、慶応義塾マンドリンクラブ第174回定期演奏会(2005年6月4日めぐろパーシモンホール)にて管楽器、打楽器を加えた編成で全楽章を演奏、好評を得た。本日演奏する「新世界より」は、管楽器の入っていないマンドリン弦楽合奏版として本邦初演である。根底に流れる民族的な音楽を、大胆な独創的な手法で仕上げた。斬新的なギターを活用とマンドリンのトレモロとピッキングは予想以上にマッチし、合奏の新たな可能性を感じた。

今回の演奏にあたり快く編曲と演奏の許可を頂きました事、心よりお礼申し上げます。

「新世界より」弦楽版 編曲秘話 小穴雄一

こここのところ、福シンの音が透き通ってきたように感じています。呼吸があってきたから、自然に音楽が流れていく、そうすると淀まないのでしょう。それで、音が透き通る。音の重なりは、けっしてべた塗りではなく、下地を生かしながら、色目があらわれてくる。そんなふう感じられます。ゆたかな呼吸と繊細な響きへのこだわり、ここに福シンの魅力があります。

「新世界より」のことを書かないわけにはいきません。一昨年、慶應の現役の学生から突然本曲編曲の依頼が飛び込んできました。なぜ、マンドリンで「新世界より」を？彼らの意図は、とにかく「弾いてみたい」ということが先にたっていたようでしたが、理屈を問い返してみると「マンドリンの表現で何が伝えられるか、試してみたい」ということでした。それならば「面白い」ということで、安請け合いしてしまいました。（最近はいつもこのパターン）これほど有名な曲ですから、原曲のイメージが強烈で、さすがに旋律と楽器の組み合わせが絶妙で、思うようにはかどりませんでした。いたずらに時間が経過していくなかで、とにかくいろいろなCDをひたすら聴いていきました。なかにはピアノの連弾版のようなものもあり、そのモノトーンの世界に出あった瞬間にひらめきました。そうだ、いっそのこと管楽器をいれないで純粋にマンドリン合奏で編曲してみよう！そう思いだったら弦楽バージョンは一気にできあがりしました。たしか3日徹夜くらいのことだったと思います。学生に「弦楽バージョンができた！」と連絡したところ、「管楽器のパートの出番がなくなってしまうのは問題」ということで、このバージョンはお蔵入りとなりました。今回、福シンでとりあげていただいたのが、このお蔵入りした幻の弦楽バージョンになります。この版はピアノの連弾のイメージをもとにつくってあります。ドヴォルザークが遠い故郷ボヘミアに寄せた郷愁の思いを込めた旋律はマンドリンのトレモロで弾いてもなかなかいい感じに聴こえてきます。もし、ドヴォルザークがマンドリン合奏のためにこの曲を書いたらこんなふうに響いたかもしれない、そんな思いでドヴォルザークの楽譜を辿っていきました。マンドリン合奏で変化をつけるためにはギターが重要です。例の有名な第2楽章の「遠き山に日は落ちて」の旋律も絃余曲折のうえギターに回ることになりました。ギターアンサンブルを囲むようにマンドリン系の楽器が寄り添うようにつくりました。マンドリン合奏によって「新しい世界」に命が注がれます。いったいどのような音が鳴るのかとても楽しみにしています。今年は是非福シンに参加したいと申し出て、パート譜までご手配いただきましたが、残念ながら仕事の関係で、当日海外出張にあたってしまいました。本番のころは「あぁ、新世界より！」というふうな気持ちを抱きつつ、アメリカの都市放浪の旅に出ていることでしょう。マンドリンのもうひとつの可能性が広がることを願っています。今回、拙い、難解な編曲を取り上げていただいたことに、感謝いたしております。ほんとうにありがとうございました。そして、ここから、ご成功をお祈りしています。

第38回定期演奏会に寄せて 常任指揮者 松永恒一

福岡シンフォニックマンドリンアンサンブル(FSME)は、ここ数年、定期演奏会のプログラムとしてクラシック音楽からの編曲作品を取り上げる傾向が続いている。「編曲もの」を中心にプログラムを組むことについては斯界でも賛否両論のあるところだが、議論を待つまでもなく、マンドリン合奏で管弦楽オーケストラの真似をしていたのでは意味がない。原曲を一旦音楽の骨格のみ(例えばピアノの2段譜)に戻し、マンドリン合奏用に再度オーケストレーションする一これが編曲の本来の手法であり、FSMEの取り上げる作品はその観点からスコアを入念に確認することとしている。編曲作品に取り組む以上は、マンドリン合奏ならではの表現を生かすことは当然のこと、マンドリン合奏でなくては表現できないというレベルに挑戦したいものである。今回取り上げるドヴォルザークの交響曲第9番は、マンドリン合奏曲として、演奏する側にとっても手応え十分である。編曲は特にギターの使用方が秀逸で、この極めて著名な交響曲の新しい魅力を引き出すことに成功している。

一方、ポツキアリの「夢の魅惑」はマンドリン合奏のオリジナル曲である。作者の音楽を余すところなく凝縮したこの作品は、その密度の濃い表現を持続させることにおいて相当の演奏力が求められる。音楽を置き去りにしない精神力が問われるのだ。マンドリンオーケストラにとって試金石ともいえる曲であり、こういう音楽に取り組むこともFSMEの真価が問われる一面だと思う。難曲であるが万全の編成で演奏に臨みたい。奏者自らが楽しんで演奏することはもちろん大切であるが、何もかも平易に説明してしまう音楽ばかりではかえって魅力がない。やわらかい肉ばかり食べているとあごは退化してしまう。よくかみ締めないと本当の味がわからない—そういう音楽に取り組むこともFSMEの存在意義だと自負している。

FSMEの指揮台に立って今年で29年となる。一般の事象なら超のつくベテランの域に達してしまいかもかもしれないが、私は情けないことにまだ慣れない。未だに「常識」の作れない自分にはさすがにあきれるが、音楽活動においての「常識」は自ら設ける自分の限界であるとも言える。限界を知らないことはある意味幸せかもしれない。ここ数年のFSMEの定演では、毎回マンドリン合奏の新しい可能性が開けるのを感じている。団員は年齢的に社会の最前線を担う世代が中心で、合奏時の編成も流動的にならざるを得ないが、そのことはむしろすべての演奏に一期一会の迫力を生じさせる結果となっているようである。これからも合奏団全員の総合力を生かし、演奏活動を続けていきたい。